

知章

世阿弥作

季は	地は	後	前
春	播磨	ワキ	ワキ
二月		シテ	シテ
		前に同じ	旅僧
		平知章	里人

「春を心のしるべにて。く。憂からぬ旅に出でうよ。

詞
「是は西國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。唯今おもひたち都一見とこゝろざし候。

道行
「旅衣。八重の潮路をはるぐと。く。なほ末ありと行く波の。雲をも分くる沖つ船。われも浮世の道いで。いづくともなき海ぎはや。浦なる閑に着きにけり。く。

詞
「さてもわれ鄙の国よりはるぐと。是なる磯辺に来て見れば。あたらしき卒都婆を立ておきたり。なき人の追善とおぼしくて。要文さまぐ書きしるし。物故平の知章と書かれたり。知章とは平家の御一門の御なかにては。誰にてかましますらん。あら痛はしや候。

「是は遠国より上りたる僧にて候ふが。是なる卒都婆を見れば。物故平の知章と書かれて候。御一門の御中にて候ふやらんと痛はしく存じ。一遍の念佛を廻向申して候。」

シテ「げにく遠國の人にてましませば。知ろしめさぬは御ことわり。知章とは相國の三男新中納言知盛の御子にて候。二月七日の合戦に。この一の谷にて討たれさせ給ひて候。されば其日も今日にあた

りたれば。ゆかりの人の立てたる卒都婆にて候。時もこそあれ御僧の。今日しもこゝに來り給ひ。廻向し給ふありがたきよ。一樹の陰一河の流。是れ又他生の縁なるべし。よくく弔ひ給ひ候へ。」
「げにく仰せのごとく。他生の縁のあればこそ。かりそめながらこゝに來て。」

シテ「思ひの玉の数くりて。」

ワキ「思ひの玉の数くりて。」

シテ
「とぶらふ事よさなきだに。

シテ、ワキ
「一見卒都婆永離三悪道。何況造立者。必生安樂国。
物故平の知章成等正覺。

下歌地
「きのふは人の上。けふは我をも知らぬ身の。しか
も弓馬の家人ならば。法にひかれつゝ。仏果に至
り給へや。

上歌
「唯一念の功力だに。く。三惡の罪は消えぬべし。
まして妙にも説く法の。道のほとりの亡き跡を。

逆縁もなどかなるべき。く。

ワキ詞

「さて知盛の御最期は何とかならせ給ひて候ふぞ。

シテ詞

「さん候知盛は。あれに見えたる釣舟のほどなり
し。遙の沖の御座船に。追ひつき助かり給ひて候。

ワキ

「さてあれまでは小船にめされて候ふか。

シテ
「いや馬上にて候ひし。其頃井上黒とて屈竟の名馬
たりしが。二十余町の海の面を。やすくとおよ
ぎわたり。主を助けし馬なり。されども船中に所

なかりし間。のする人もなくして。又もとの汀におよぎあがり。此馬ぬしの別れを慕ふかと思しくて。沖の方に向ひ高嘶きし。足搔きしてぞ立つたりける。畜類も心ありけるよと。見る人あはれを催しけり。

地「越鳥南枝に巣をかけ。胡馬北風に嘶えしも。旧郷を忍ぶ故なりとか。胡馬は北風をしたひ。此馬は西にゆく船の。纜につながれても。ゆかばやと思

ふ心なり。

ロング地「さるほどに。日もはや暮れて須磨の浦。海人の磯屋にやどりして。逆縁ながらとぶらはん。

シテ「げに有難や我とても。よそ人ならず一門の。内外にかよふ夕月の。後の世の暗を訪ひたまへ。

地「そもそも一門の内ぞとは。御身いかなる人やらん。

シテ「今は何をか包井の。水がくれて住むあはれ世に。

地「亡き跡の名は。

シテ 「白真弓の。」

地 「帰るかたを見れば。須磨の里にも野山にも。行か
で汀のかたをなみ。蘆辺をさしてゆく田鶴の。浮
きぬ沈むと見えしまゝに。うしろかげも失せにけ
りや。うしろかげも失せにけり。」（中入）

ワキ歌 「夕波千鳥友寐して。く。処も須磨の浦づたひ。
野山の風もさえかへり。心も墨の衣手に。此御経
を読誦する。く。」

後ジテ一声 「あら有難の御弔ひやな。われ修羅道のくるしみの。
ひまなき内にかくばかり。魄靈にひかれて來りた
り。浮ぶべき。波こゝもとや須磨の浦。」

地 「海すこしある通路の。」

シテ 「うしろの山風上野のあらし。」

地 「草木国土有情非情も。悉皆成仏の。彼岸の海ぎは
に。浮び出でたる有難さよ。」

ワキ 「ふしぎやなさもなまめきたる若武者の。波にうか

びて見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ詞
「誰とはなどやおろかなり。御弔ひのありがたさに。

知章これまで参りたり。

ワキ
「さては平家の公達を。まのあたりに見たてまつる

事よと。昔にかへる浦波の。

シテ
「浮織物の直垂に。妻にほひの鎧着て。

ワキ
「さも花やかな御姿。

シテ
「所もさぞな。

ワキ
「須磨の浦に。

地
「おぼろなる。仮の姿や月のかげ。く。うつす絵
島の島がくれ。行く船を。惜しひぞ思ふ我父に。
わかれし船影の。あと白波もなつかしや。よしと
ても終にわが。憂き身を捨てゝ西海の。藻屑とな
りし浦の波。かさねて訪ひてたび給へ。く。

ワキ詞
「さらば其時の有様くはしく御物語り候へ。

地クリ
「さても其時の有様かたるにつけて憂き名のみ。龍

田の山の紅葉ばの。くれなる靡く旗のあし。ちり
ぐになるけしきかな。

シテサシ
「主上二位殿をはじめ奉り。其外おほいどの父子。

地
「一門皆々船に取り乗り。海上に浮ぶよそほひ。唯

滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し。

シテ
「其中にも親にて候ふ新中納言。われ知章監物太

郎。主従三騎に討ちなされ。

地
「御座船をうかゞひ此汀に打ちいでたりしに。敵手

シテ
「そのひまに知盛は。

しげくかゝりし間。又ひつかへし打ちあふ程に。
知章監物太郎。主従こゝにて討死する。

シテ
「そのひまに知盛は。

地
「二十余町の沖に見えたる。大臣殿の御船まで。馬
を泳がせ追ひついて。御船に乗りうつり。かひな
き御命たすかり給ふ。

クセ
「知盛其時に。おほいどの、御前にて。涙を流しの
たまはく。武蔵の守も討たれぬ。監物太郎頼賢も。

あの汀にて討たるゝを。見すてゝ是までまるる事。

面目もなき次第なり。いかなれば子は親のため。

命を惜しまぬ心ぞや。いかなる親なれば。子の討

たるゝを見すてけん。命は惜しきものなりとて。

さめぐと泣き給へば。よその袖もぬれにけり。

おほいどのものたまはく。武蔵の守はもとよりも。

心も剛にして。よき大将と見しそとて。御子清宗

の。方を見やりて御涙を。ながし給へば船のうち

に。つらなれる人々も。鎧の袖をぬらしけり。

シテ
「武蔵の守知章は。

地
「生年二八の春なれば。清宗も同年にて。ともに若葉の磯馴松。千代を重ねて栄ゆくや。累葉枝を連ねつゝ。一門々をならべしも。今年の今日はいかなければ。所も須磨の山桜。若木はちりぬ埋木の。浮きてたゞよふ船人と。なりゆく果ぞかなしき。

「げに痛はしき物語。おなじくは御最期を。懺悔に

語り給へや。

シテ
「げにや最期のありさまを。 懲愧懲悔にあらはし。

修羅道の苦患まぬかれん。

地
「げに修羅道のくるしみの。 その一念も最期より。

シテ
「聞きつるまゝの敵にて。

地
「すはや寄せくる。

シテ
「浦の波。

地
「团扇の旗は児玉党か。 ものくしといふまゝに。

監物太郎が放つ矢に。 敵の旗さしの。 首の骨のぶ
かに射させて。 まつ逆さまにどうと落つれば。

シテ
「主人とおぼしき武者。

地
「主人とおぼしき武者。 新中納言を目にかけて。 か
けよせて討つ処を。 親を討たせじと。 知章かけ塞
がつて。 むずと組んでどうと落ち。 取つて押さへ
て首かき切つて。 起きあがる処を又。 敵の郎等落
ち合ひて。 知章が首を取れば。 終にこゝにて討た

れつゝ。其まゝ修羅の業にしづむを。思はざるに御
僧の。弔ひは有難や。是ぞ誠の法の友よ。これぞ
まことの知章が。跡とひてたび給へ。亡きあとを
訪ひてたび給へ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第二輯」大和田建樹著